

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 14 日現在

機関番号：25407

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24730427

研究課題名(和文)多文化共生の民族祭りにみる存在の政治と人間関係形成の事例研究

研究課題名(英文)A case study on the "politics of existence" and human relations in a multicultural festival

研究代表者

山口 健一 (Yamaguchi, Ken'ichi)

福山市立大学・都市経営学部・講師

研究者番号：90614149

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：研究期間内において、対象事例である「東九条マダン」への継続的な参加観察を実施するとともに、調査対象者へのインタビューを実施した。また対象事例の思想的源泉をなす「在日朝鮮人の民衆文化運動」について文献収集を行った。さらに対象事例の実践的源流の一つである「ハンマダン」の調査と分析を行った。

本研究の結果、次の成果を得た。ハンマダンがその民族文化の中心的な役割を担う東九条マダンは、在日朝鮮人の民衆文化運動の思想との連続性を有している。その実践は「存在の政治」と呼べるものであるとともに、東九条マダンの担い手の人間関係がそれを促進している。

研究成果の概要(英文)： I did participant research and interviewing with its members in the case of "Higashi-Kujo Madang". Furthermore, I collected documents of "Peoples' cultural movement by Zainichi-Koreans" and researched and analyzed "Han-Madang" which is one of the practical origins of "Higashi-kujo Madang".

As a result of the study, I got new findings below. "Higashi-Kujo Madang" of which "Han-madang" takes a role of the ethnic culture has succeeded to some part of "Peoples cultural movement by Zainichi-Koreans." Its practice can be called "politics of existence" and its members' relationship promotes the practice.

研究分野：社会学

キーワード：多文化共生 在日朝鮮人 民族まつり 民衆文化運動 シンボリック相互行為論

1. 研究開始当初の背景

これまで報告者は、共生社会の実践という観点から在日朝鮮人と日本人の「対話」実践の事例研究を行ってきたが、そこに1)参加者が関心を有する少数の人びとに限定される点、2)研究上照準される属性が在日朝鮮人と日本人に限定される点という限界があった。そこで本研究は、在日朝鮮人 - 日本人関係、障がい者 - 健常者関係、社会的弱者 - 強者関係といった複合的な人間関係を考察でき、多様で多くの人びとが参加する東九条マダンを事例として、その意味世界の論理と人間関係の考察を行うこととした。

2. 研究の目的

本研究は、在日朝鮮人の民族文化を中心とした「多文化共生の民族まつり」の事例を調査研究することにより、その意味世界にみられる「存在の政治」という社会変革の戦略を明らかにする。またその事例における多様な属性を持つ担い手たちの人間関係形成を考察する。

具体的には、参加観察(実行委員会やまつりの準備日・当日)と、担い手へのインタビュー、文献や資料の収集を行う。また自由民主主義論やマイノリティ研究や共生研究の諸文献を収集し、当該事例の知見をそれらに位置付ける。

3. 研究の方法

事例の分析に際して、シンボリック相互行為論の分析視角(A.ストラウスの相互行為論)と方法(グラウンデッド・セオリー法)を用いた。本研究は、A.ストラウスの相互行為論の中でも意味世界の分析に適した「社会的世界論」(山口 2007)を採用し、東九条マダンの意味世界の理念、活動、メンバーシップ、歴史を包括的に考察した。なお、A.ストラウスの相互行為論は、日本社会や在日朝鮮人社会といったマクロな視座と当該事例の意味世界やコミュニケーションといったミクロな視座を結ぶメゾな視座の分析視角である。

グラウンデッド・セオリー法については、A.ストラウス&J.コービン版(2004、2012)を採用するが、事例研究に適するように一部修正した箇所がある。主な修正点は、(1)収集するデータの範囲を、研究課題と事例に関連するものに限定しつつ、理論的飽和を設定すること、(2)フォーマル理論を志向しつつも、具体的領域理論の次元で事例研究を行うこと、(3)事例研究からの仮説形成として、データの分析から知見ないし理論を抽出することである。

これらの分析視角と方法を用いつつ、データの切片化と類型化、類型間論理的関係付けを行った。

4. 研究成果

(1) 在日朝鮮人の民衆文化運動の思想

東九条マダンの事例を調査していく中で、当該意味世界の思想的な源流に「在日朝鮮人の民衆文化運動」があることが明らかになった。そこでその運動を韓国から日本に紹介した梁民基の文献や資料を収集し、「在日朝鮮人の民衆文化運動」の思想における論理構成を考察した(山口 2015)。

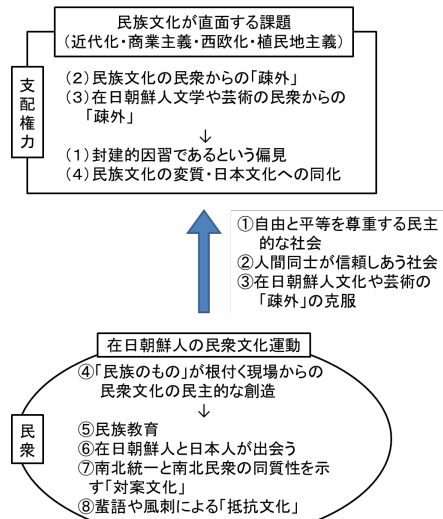


図1 在日朝鮮人の民衆文化運動の論理

在日朝鮮人の民衆文化運動が着目する民族文化は、1)植民地主義的思考に基づき、それが異物や呪術や乱痴気騒ぎといった封建的因習であるという偏見、2)近代化の称揚主義の中で、民族文化が民衆から切り離された「疎外」、3)近代化や西欧化の影響を受けた在日朝鮮人文学や芸術が民衆と切り離された「疎外」、4)商業主義や西欧文化や日本文化の影響による民族文化の変質、という課題にさらされていた。それらの背後には支配権力(の文化や社会秩序)によって、民族文化が民衆から切り離される「疎外」の問題が横たわっていた。1)と4)は2)と3)から派生したものと考えられるため、2)と3)の克服が在日朝鮮人の民衆文化運動の中心的課題となる。こうした状況の中でその運動は、

自由と平等を尊重する民主的な社会の実現と、人間同士が互いに信頼しあう社会を共同目標とし、在日朝鮮人文化や芸術の「疎外」の克服を目指す。そのためにその運動は、民族の集団的な紐帯感や解放感を生み出す共感帯をなす在日朝鮮人の民衆文化を、「民族のもの」が根付く生の現場から民主的に創造する。それは在日朝鮮人の民衆による民族教育の実践現場であり、日本人と在日朝鮮人が出会う場所である。またそれは、南北の統一と南北の民衆の同質性を表す「対案文化」であると同時に、民衆を抑圧する支配権力に対して蜚語や風刺により挑戦する「抵抗文化」である。その思想の核は、
- が実践される の形成であり、それを

通じて - が目指される(山口 2015 図 1)。

(2) ハンマダンの意味世界

この考察を通じて、在日朝鮮人の民族文化を中心としつつも、日本人もその担い手となり、また障がい者などの社会的弱者の主題も扱う東九条マダンの思想的な系譜関係が明らかにされた。しかしながら、歴史的に見ると、東九条マダン創設の前に「民族文化牌ハンマダン」が設立されており、それが東九条マダンにおける在日朝鮮人の民族文化を中心に担っていた。そこで本研究は、東九条マダンの意味世界を把握するために、ハンマダンと「在日朝鮮人の民衆文化運動の思想」との連関を考察した(この考察についての論文は学会誌に投稿し現在査読中である)。

ハンマダンは、在日朝鮮人の民衆による民族文化の創造と継承、日本人と在日朝鮮人の邂逅の場所、民族的同質性を表す「対案文化」、支配権力に対する「抵抗文化」、自由で平等な社会の希求といった点において、「在日朝鮮人の民衆文化運動」の思想との連続性を有していた。ただしハンマダンは、そのメンバーを在日朝鮮人に限定しない、日本人も共に担う民衆文化運動である。その核をなす活動は、在日朝鮮人の民族文化の創造と表現であり、その活動内容において在日朝鮮人の同質性が形成される。また一方で、人間の解放を希求する人びとの連帯という理念において、日本人もその活動を担う。ハンマダンは、その双方を満たす「共に生きる」理念を掲げる。その「共に生きる」とは、人間の解放や「在日朝鮮人の民衆文化運動」の思想における自由で平等な社会という普遍主義的な観点を強調し、その実践主体を個人とすることにより実践される。つまりハンマダンは、在日朝鮮人という民族的共同性よりも、差別され底辺に置かれた民衆の個々人の多様性を尊重する民衆文化運動であった。

(3) 東九条マダンの意味世界

この考察を通じて、東九条マダンの理念と実践は、共同体主義的な「在日朝鮮人の民衆文化運動」の思想を源流とし、ハンマダンにおけるその思想の個人主義的な転換を経て、形成されていることが明らかになった。この知見により東九条マダンの意味世界の特徴を考察する素地が整った。

東九条マダンは、これまでの先行研究において次のように評価されてきた。1980年代から1990年代に至る在日朝鮮人の民族まつりの展開の文脈のなか、あいまいな「民族」「共生」の理念や4つの理念を掲げて東九条マダンが開催された。それは、担い手が自発的に参加して新たな文化を創造し、まつりが一つのメディアやユートピアとして機能しつつ、そこに参加する在日朝鮮人の自己承認や日本人の在日朝鮮人理解を生み出すものである。またそれは、地域において在日朝鮮人の存在を可視化し民族文化を公共化する一方

で、地域への着目により在日朝鮮人理解の国家関係の解釈枠組みへの回収を避け、地域イメージを変質することにより地域での共生を図り、排外主義運動を乗り越えるものである。またそれは、理念的には多様な参加を可能にする「楽しさ」と「あいまいさ」により、組織的にはハンマダンが在日朝鮮人の民族文化を中心に担うことにより実践される。

こうした先行研究の知見には、歴史的に継承され展開されてきた「在日朝鮮人の民衆文化運動」の思想への評価の欠如があり、そのため東九条マダンに通底する実践の論理が明らかにされていないという問題があった。そこで本研究は、東九条マダンの意味世界の特徴を考察した(この考察についての論文は現在執筆中である)。

その結論を要約すれば、東九条マダンは、糾弾やデモや法的闘争を行い参加者の限定や参道者の組織化を行う「政治・社会運動」と差異化する論理として「個人参加の原則」を掲げることにより、多様な人びとの参加を可能にする。またそれは、マイノリティ当事者のみに参加を限定するのではなくマイノリティの置かれた現状とマイノリティが抱える問題を主題とすることにより、多様な人びとの参加を可能にする。それは、自由や平等や人権といった普遍的価値を、東九条地域で具体化する実践として行われる民衆文化運動であった。多様な人びとが参加しやすいまつり形態による実践は、マイノリティへの偏見や蔑視を解消させるとともに、地域において東九条マダンに否定的な見解をもつ人びとの考えも解消させていった。またその実践における偏見解消の効力は、東九条マダンのメンバーたちの対等で個人的な人間関係によっても促されていた。つまり、東九条マダンの民衆文化運動とは、「政治・社会運動」のように社会変革を直接的に目指す運動と異なり、地域でのまつりの存続を通じて、人びとの偏見を解消させる運動である。それは、いわば「存在の政治」実践と呼ぶことができる。

(4) 今後の課題

今後は、本研究で得られた上述の知見とデータをもとに、さらなる考察と論文執筆を続ける予定である。それらは本科研による研究の一環であるので、以下列挙しておきたい。

東九条マダン当日のまつり表象の形態の研究。本研究で得られた知見は、民衆文化運動としての特徴を強く有する東九条マダンの意味世界の特徴であった。それがどのようにまつり当日の表象形態に表れているのかを、当日の飾りつけや演目、プログラム、出店等のデータから分析する。これはいわば「存在の政治」実践の形態面でのメカニズムの考察である。

東九条マダン実行委員会メンバーにおける人間関係形成の研究。東九条マダン実行

委員会には、多様なマイノリティが参加しており、またマジョリティの日本人も参加している。その中で人間関係のあり方を考察する。これはいわば「存在の政治」実践の内容面でのメカニズムの考察である。

【引用文献】

- A. ストラウス & J. コービン、2004、『質的研究の基礎（第2版）』医学書院。
、2012、『質的研究の基礎（第3版）』医学書院。
山口健一、2007、「A. ストラウスの社会的世界論における「混交」の論理」『社会学研究』第82号、東北社会学会、103-23頁。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

山口健一、「在日朝鮮人の民衆文化運動の思想とその論理」『部落解放研究』Vol.21、2015、査読有、25-46頁。

〔学会発表〕（計2件）

山口健一、「抵抗」と「自己解放」の民族民衆文化運動と「文化＝政治」、日本社会学会大会、2013年10月12日、慶應義塾大学（東京都港区）。

K.Yamaguchi, “A Practice of Zainichi Korean Ethnic Festival as “Multicultural Conviviality” in Japan,” Annual meeting of Society for the Study of Symbolic Interaction, 17th of August, 2014, San Francisco (USA).

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

〔その他〕

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山口健一 (YAMAGUCHI, Ken'ichi)
福山市立大学都市経営学部講師
研究者番号：90614149